

26 トマト

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
半促成加温・無加温	32	県下全域
ハウス雨よけ	37	県下全域
ハウス抑制	20	県下全域

※①前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。

②露地栽培の場合は、「ハウス雨よけ」に準ずる。

(1) 特徴及び吸収特性

作土が深く肥沃で保水性、排水性の良い土壌が向く。根は深さ1m、幅3m以内に張るが、多くは表層に分布する。土壌の保水性、排水性を良好にするよう、休閑期に堆肥、苦土、石灰などを施用し、深耕する。

トマトは**吸肥力が強く**、多肥では茎葉ばかりが繁茂する。**生育初期は肥効を抑え**第一花房をしっかりと着果させ、その後は**徐々に肥効を高め**栄養生長である茎葉の伸長と、生殖生長である果実の肥大のバランスを取りながら収穫を続ける。1～3段目の下位花房にしっかりと着果すれば以後の生育は安定しやすい。

第一花房の着果期（第一果がピンポン玉大）から養分吸収量は増える。窒素は定植から収穫末期までほぼ直線的に吸収が行われるので、**生育期間を通じて適度に効かせる**ことが大切である。特に**第一花房の肥大期から吸収量が多くなる**ので、この頃より肥効を高めるようにすることが望ましい。初期に窒素の肥効が高いと茎葉が過剰に繁茂し着果不良となる。**窒素過剰では過繁茂で葉色が濃くなり、異常茎、尻腐れが発生**する。

基肥の全量を全面散布して耕起する場合は、深く耕起する。第3花房の着果始め頃から追肥を行う。追肥は4～5回に分施する。ハウス栽培が主であるためかん水量の調節により肥効を調節することも可能である。トマトの施肥量は作型により異なる。定植期の地温が低い半促成栽培やハウス雨除け栽培では基肥量を多めとする。定植期の地温が高く収穫期も短い抑制栽培では施肥量を少なめとする。